



質問力強化



# 先入観を裏切る資料を選ぶ 相手が話したいことを探れ

取材時、効果的な質問をするためには、ただやみくもに資料にあたればよいというわけではない。朝日新聞社「be」で多くのインタビュアー取材をする及川智洋さんは、事前準備で、新聞記事やウェブ、取材相手が出している本にあたる時、まずは自分が取材する対象に持つイメージと比べ、「意外に思うこと」、「先入観と異なること」を探すという。

この時点で、集めた資料は、周迎取材をした人物、気になる出来事があった年代、キーワードごとに付箋を貼るなどして、簡単に整理をしておく、あとあと質問を考える際、記事を書く際に役立つ。加えて、取材対象者について調べていく段階で、「自分がぜひ聞きたいこと、相手がぜひ話したいことが明確になれば望ましい」という。とはいえ「データは集めすぎると取捨がつかなくなる」とも事実。「やっぱり、どこかで見切りをつけないと際限がないです」と話す。話を聞くための準備が、いつの間にか準備のための準備になってしまっ

取材前に用意する資料は、取材相手1人につき厚さ3cmほどになる。裏に合ったものに、簡単なキーワードを書いた付箋を貼っておくと、質問作成時や事実確認のときに便利だ。



# 予断は捨てるべき 記事がつまらなくなる

及川さんに「be」の取材では、どの程度質問を考えるのかを尋ねると、「あんまり多くは用意しないですね。何を聞きたいのか、確認して頭が整理できればよいので、5〜10個くらいですかね」という答えが返ってきた。こう聞けば答えてもらえるだろう、というような、「予断を持たない」ようにするために、答えが予断できそうなことを確認するだけの質問に終始すると、相手の答えもイエス、ノーでぶつ切りになり、話が深くないので、出来るだけ答えが予想しにくい質問も盛り込む。

「お答えいただいたことに、いい意味での驚きがないときは、聞き方を変えるのですが、それが相手の関心領域に踏み込むことができれば、道が開ける場合もあります」と。聞きたいテーマが決まっても、質問の仕方が悪ければ、面白い答えが得られない場合もある。話したいことに沿って、聞き方を変えられるようになることが大事だ。現場で柔軟に聞き方を変えられるように、事前準備の段階で、取材対象の関心領域は何か、知っておきたい。



及川 智洋さん

おいかわ・ともひろ／1966年生まれ、1990年朝日新聞入社。旭川支局・甲府支局・東京社営部、名古屋報道センターなどを経て、2006年4月からbe編集グループ。「be on Saturday」で「フロンランナー」、「愛の旅人」、「逆風漁帆」などを取材。

# 1 事前準備: 先入観を裏切る資料を



interview

## 取材

# 基礎トレーニング

毎週さまざまな業界の著名人にインタビューをする朝日新聞社「be」。編集グループの及川智洋さんに、取材に関する「基礎」の話を伺った。

# 2 質問作成: 予断を捨てる



# 3 取材段取: 正確な記録をとる



# 4 技を磨く: 1人でできる質問力強化

